

覆面タクシー

第9回

モノ申せない労組の事情とは？ 次代幹部育成のための奮闘を ～元労組幹部S氏の呟き



本零細の第3回で労働組合について「必要性」や「職場が労組をどのように見ているのか」などを掲載させていただいたが、今回は「労働組合の現状」や「なり手のない組合役員をどうしていくのか」などをお話させていただきたい。もちろん当労組の現状が中心だが、一般的な労働組合もそうであろう、という憶測も含めての話とさせていただきたい。

労組の現状は、周知のように長期的に衰退傾向にある。労働組合数は減少を続け、雇用者数に占める労働組合員数の割合である推定組織率の低下が続いている。このような状況に対して、労組が危機感を持っているのかと言えば、そうは感じられない。組織拡大を重点課題として取り組んでいないことや組織拡大する見込みがないなど、理由はそれぞれだが、一番の理由は「取り組む姿勢がない・やる気がない」ということだと思う。こういった姿勢は、組織拡大だけでなく、組合運動・活動・労使交渉も含め全体に及んでいると私は思う。もちろん、しっかり取り組んでいる組織があるのは言うまでもない。なぜこのような状況になってしまったのか。社会情勢や時代の流れなど、外的要因もあるが、大きな要因は組合役員の質の低下にあると思う。労組役員の任期は概ね組合規約などで決められている。経験を積んだ役員が規約に従って退任していくが、後任の役員のなり手がいないため、また役員定数の数合わせのため、失礼な言い方が資質に乏しい組合員に役員を依頼する、これでは運動が低下するのも当然である。そしてこのような役員が会社と儀礼的な交渉を行う。交渉結果は目に見えている。

なぜ資質のある組合役員のなり手がいないのか？「組合役員のなり手が居なく困っている」のは当労組でも十数年前からの問題である。そして状況は、年々悪くなっている。なり手のない理由の一つは、労働組合役員という役職に魅力がないことにある。多くの人は仕事が忙しくて時間がない、特に隔日勤務者は疲れが大きく、労組役員としての活動まで手が回らないとい

う。しかし趣味の釣りやゴルフなどには早朝から出かけるし、必要不可欠な事には時間をやりくりして取り組む。労組役員の活動が本当に魅力なら、何をおいても活動に参加するはずであるが？また、今の若者は失礼な言い方をすれば、学生時の教育問題もあるが、他人とのかかわりを煩わしいと感じ、一人で居る事を志向し、協調性に欠け、自分の事しか考えていない方が増えていると言われる。「人の面倒を見るのが嫌、邪魔くさい」というのも理由の一つである。ただでさえ選挙活動に繰り出されたり、理由の説明もないまま署名させられたり、意味のない会議に出席させられたり。「何をしたら良いのか分からない」というのも理由の一つである。これも前役員が組合運動をきちんと把握できていないため、決められた活動しか行ってこなかった事にあると思う。、組合に関する雑務を強制される役目というのも役員になりたくない理由だ。

確かに組合役員を務めることは、決して楽ではない。特に非専従者は仕事を持ちながらなので時間のやりくりが難しく、精神的にも体力的にも負担がかかる。しかし組合役員は貴重な経験ができる。社内外や組織内外の人脈の広がり、コミュニケーション能力の高まり、会社全体の動きの把握、また、行政や自治体の関係者・議員など、たくさんの人に会えるので人間の幅や知識が広がるといったメリットもある。労働組合は様々な可能性を持った組織である。私は、労働組合役員として培ったいろいろな経験は自身の人生においても貴重な財産になるはずであると確信している。

当労組では、役員について、ひと昔は「やりたい」と思っても、手を挙げる者が複数居り、なかなか成るものではなかったが、今では、まったくいないのが現実だ。役員になる強制はできないが、前述した役員定数の数合わせの役員選びではなく、組合員を守り、組合員のための運動を行う組合役員を選出してもらいたいし、次代の労組幹部を育てるためにも、現役の幹部たちの奮起に期待したい。